人間科学部社会学科

代表３人が卒論発表

多くの教員、学生らが熱心に発表を聞いた

人間科学部社会学科の代表論文発表会が1月31日、生田キャンパスで開かれ、4年次生3人が教員、後輩ら約200人の前で、卒業論文を発表した。

同学科は、14のゼミを「文化・システム系」「生活・福祉系」「地域・エリアスタディーズ系」の3分野に分け、各分野から1論文を代表論文に選出する。今年度は、▽沖ひかるさん「日系人のアイデンティティの確立に影響を与えるものとは～ワシントン州シアトルを例に挙げて～」＝藤原法子ゼミ▽長坂京平さん「私らしさの作り方―インスタグラムで見る『カギ』をする本当の意味―」＝後藤吉彦ゼミ▽河田泰明さん「『貧困バッシング』にみる『構造的排除』の考察」＝樋口博美ゼミの3論文が選ばれた。

発表者の3人。左から長坂さん、沖さん、河田さん

沖さんは、高祖父が米国シアトルに移住したという自身のルーツから日系アメリカ人を研究テーマに選んだ。日系アメリカ人のアイデンティティの形成には、アメリカ社会への同化が関連していると指摘し「グローバル化が進む現代社会では、少数派との共生が重要となる。自分とは異なるものを受け入れ、その考え方を取り入れることが、私たちが目指すべき多様性の在り方ではないか」と論じた。

長坂さんは、日本の若者がSNSで、カギをかけて情報公開を制限する心理を考察した。「『いいね！』をもらうという承認欲求よりも、批判で傷つくことを恐れており、それがカギをかける心理につながっている。しかし、誰に公開するかという選別の葛藤が生まれ、これが新たな〝私らしさの作り方〟になっている」と語った。

河田さんは、貧困や生活保護受給をめぐるバッシングを事例に、バッシングの発生要因と日本社会の持つ、排除のメカニズムの解明に取り組んだ。排斥側は、非排斥側の特別な点を問題視し、バッシングが生まれ、やがて構造的排除が生じる――と、結論付けた。

それぞれの発表に対し、大学院文学研究科修士1年次の渡辺健二さん、田中直登さん、石橋拳さんが講評した。

また、これから卒業研究に取り組む後輩に向けて、「日ごろから『なぜこうなるのか?』と考えることが、テーマ設定などのヒントになる」（長坂さん）、「現実を分析する姿勢が大切。当たり前を疑ってほしい」（河田さん）など、アドバイスを送った。

ゴルフスクール起業　松島圭祐さん（経営4）

夢の実現へチャレンジ

スイングに徹底的にこだわり、指導するゴルフスクールがある。運営する松島圭祐さん（経営4）は「ゴルフで人々を幸せにしたい」と起業し、たくさんのゴルファーを育てる夢に向かって進んでいる。

石川遼選手に憧れ小学生でゴルフを始めた。専大附属高校を経て、大学進学後もゴルフ部に所属。一方、起業にも関心があり、2年次で学内のベンチャービジネスコンテストに応募した。この時は書類選考で落選したが、周囲の助言を受けてアイデアを精査し翌年再挑戦。優秀賞を受賞した。

アイデアは、ゴルフコーチのマッチングアプリ。実現に向け動いていたところ、出会ったある人に厳しくダメ出しをされる。それが今、松島さんが「師匠」と慕うベテランコーチだった。

「起業を急ぎすぎ、自分では指導できないからほかのコーチを頼ろうとしていたことが恥ずかしくなった」と振り返る。

まずは自分のゴルフを見直そうと、「師匠」が提唱するスイングの理論を徹底的に学んだ。すると面白いくらいに上達。さらに理解を深めるため、学んだことをアウトプットしようと無料レッスンを始めた。同時に2019年2月、合同会社GOLKETを設立した。

松島さんがレッスンした専大ゴルフ部の先輩・加藤勇希さん（平31商）は8月、見事プロテストに合格。先輩の活躍は松島さんの自信にもなり、本格的に事業に取り組むため10月に東京・東銀座のインドアゴルフ練習場にスクールを開設した。

松島さん自身もプロゴルファーの夢を持ち続けているが、今はスクールに情熱を注ぐ。「教えた人が上達するのが何より。最近コースを回ったときに初めてお客さんに負けた。悔しさよりもうれしさが勝った」とほほ笑む。

「夢を追うには稼ぎが必要」と冷静に語り、現在2カ所に増えたスクールのさらなる拡充を目指している。

また、ゴルフのレッスン動画を作成、配信することで情報発信と収入確保を両立する。「今の時代、夢への道も稼ぎ方もたくさんある。学生だからと限界を決めずにチャレンジすべきだ」と視線はどこまでも真っすぐだ。

大学4年間、人脈づくりを大切にしてきた。「たくさんの人の助けで今の自分がある。これからも知識を積み重ね、前に前にと進んでいく」と力強く誓った。

「ゴルフの上達やコミュニティーづくりで人々を幸せにしたい」と語る松島さん

地元益子で作陶目指す　木村晃基さん（経営4）

「陶芸の可能性を広げたい」

ろくろを回す木村さん。「ビジネスと作陶の両立を目指したい」と話す

「大学で学んだ経営学の知識を生かし、新しい陶芸の可能性を広げていきたい」。そう語る木村晃基さん（経営4）は卒業後、京都で陶芸の基礎を学び、いずれは地元・栃木県益子市での作陶を目指す。

益子焼の窯元の家に生まれたが「ほとんどろくろにも触ったことがなかった」という。大学卒業後は企業に就職するつもりでいたが、アルバイト先など大学の外で個性的な社会人と接する機会が多く、その人たちとの会話が意識を変えるきっかけになった。

「伝統工芸で生きていくのは厳しいと思っていたが、東京で出会った人たちは逆の見方。今の時代だからこそ可能性があり、日本文化として海外に発信できるのではないか言われ、そうかなと思うようになった」。2年間休学し、ワーキングホリデーでニュージーランドに滞在したことで海外に目を向けるようになった。

見山謙一郎経営学部特任教授も背中を押した一人。見山特任教授が主宰する次世代人財塾「適十塾」の活動にも参加し、昨年秋には「適十塾」のメンバーと益子ツアーを開催。陶芸体験や益子焼の器で食事するなど、物の消費ではない「コト消費」をテーマにし、消費者が体験することが、単に作品を陳列するより商品価値を上げると学んだ。

見山特任教授が論じるベンチャー企業の可能性にひかれ「伝統工芸と経営の両方にチャレンジできる」と陶芸の世界に進むことを決めた。春から京都府立陶工高等技術専門校で技術を学ぶ。木村さん自身は美術や陶芸を専門に学ぶのは初めて。今年になって本格的にろくろを回し始めた。「難しいけれど、幼いころから祖父や両親の作業を見ていたせいか、ろくろの音で、土に触るタイミングなどがなんとなく分かる」と笑う。

「いい方向に流されながら自分を変え、陶芸にたどり着いた」という木村さん。

「これから先も周りからいい影響を受けながら、自分にしかできない作品を作りたい」と新たな一歩を踏み出す。